

山岳診療所における看護活動

— 北アルプス・常念診療所において —

A Report on Nursing in a Clinic in a High Mountain Area

— From the Jonen Clinic in the Japan Alps —

集中治療部・救急部：下村 陽子

看護部 副看護部長：根本三代子

〈要 旨〉

北アルプスの夏山シーズンには20以上の大学医学部や公立病院が山岳診療所を開設している。信州大学医学部も1986年（S 61年）7月20日に常念岳（海拔2,857m）北部の鞍部、常念乗越（海拔2,466m）にある常念小屋本館に隣接する冬期小屋を利用する形で開設した。

診療所スタッフは医学部OBや学生、看護婦たちで、3～5人交代で詰めている。皆、自分の休暇を利用したボランティアである。

常念山系は北アルプスの中では比較的標高も高くなく、温和な山容から集団登山や子供連れの登山、さらに近年の中高年の登山ブームにより高齢者の登山も増加している。したがって、それに伴い診療所を利用する人も様々である。

診療は医師が行っており、看護婦は診療介助がほとんどであるが、限られた器具や薬品をいかに活用するか、山登りで疲労しきって診療所を訪れた人をいかに癒すかなど役立っていることは大きい。

そこで、病院施設を離れた山岳診療所における看護婦の様子を報告する。

〈キーワード〉

山岳診療所 常念診療所 看護婦活動

I. はじめに

北アルプスの夏山シーズンには、全国各地より登山客が訪れている。その数は年々増える一方で、それに伴い山岳事故や登山中の病気・けがなども増えている。いざという時に応急処置をする場の存在は重要であり、山岳診療所は登山者にとって非常に心強い存在となっている。

夏の登山シーズンには、北アルプス、富士山を中心に、20以上の山岳診療所が開設されている。

（表1）

信州大学医学部も1986年（S 61年）7月20日に常念岳（海拔2,857m）北部の鞍部、常念乗越（海拔2,466m）にある常念小屋本館に隣接する冬期小屋を利用する形で開設し、毎年7/20～8/20の一ヶ月間にわたり診療を行っている。

診療所スタッフは、信州大学医学部OBや学生、看護婦たちで、3～5人交代で詰めている。皆、自分の休暇を利用したボランティアである。山岳部の診療所係りの学生がメディカルスタッフの募集から、診療材料の準備、診療所の運営にいたるまで主体的に行ない、我々はそれをサポートする形をとっている。

今年（1998年）は、診療所が開設され13年目となるため、振返りという意味で山岳診療所における看護婦の様子を報告する。

表1 山岳診療所の所在地と派遣団体（1998年現在）

所在地	派遣団体
剣沢管理事務所内	金沢大学医学部
雷鳥沢管理事務所内	金沢大学医学部
立山室堂ターミナルビル内	富山県立中央病院
太郎平小屋内	日本医科大学
白馬村村営頂上宿舎内	昭和大学医学部
白馬山荘内	昭和大学医学部
冷池山荘内	千葉大学医学部
三俣山荘内	岡山大学医学部
双六小屋内	富山医科薬科大学
燕山荘内	順天堂大学医学部
常念小屋	信州大学医学部
蝶ヶ岳ヒュッテ内	名古屋市立大学医学部
槍ヶ岳山荘内	東京慈恵会医科大学
穂高岳山荘内	岐阜大学医学部
西穂山荘内	東邦大学医学部
澗沢ヒュッテ内	東京大学医学部
徳沢園隣	日本大学医学部
東京医大上高地診療所	東京医科大学
白山室堂センター内	金沢大学医学部
富士山吉田口7合目鎌岩間隣	千葉大学医学部
富士宮口8合目医療センター	浜松医科大学
南ア・北岳山荘内	昭和大学医学部

II. 紹介内容

1. 診療所スタッフ人数（図1）

毎年、多くの看護婦がスタッフとして協力してくれている。しかし、最近では、人数を集めるのに少し苦労するようになってきている。

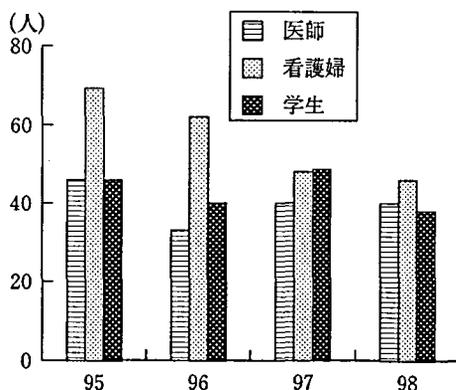


図1 診療所スタッフ人数（1995～1998）

2. 診療患者人数・疾患別割合 (図2・3)

今までの患者人数の推移は、90人～160人と差があるが、これは天候に左右されやすく、昨年の例ではこの山岳域の地震が影響していた。

患者は、山上で体調を崩したり、怪我をした登山者や山小屋従業員の応急処置がほとんどであり、最近4年間では、外科的外傷が35%と最も多く、次いで感冒・呼吸器系疾患、次に頭痛・嘔吐などの高山病様症状です。重症例は数少ないが、時にはヘリコプター要請に至るようなケースもある。しかし、ヘリコプターは夜間や悪天候時などの運航に制約があるため、診療所スタッフのみでの対応をせまられる場合もある。そのような意味で、まさに山の上の診療所も、へき地における救急現場のひとつである。

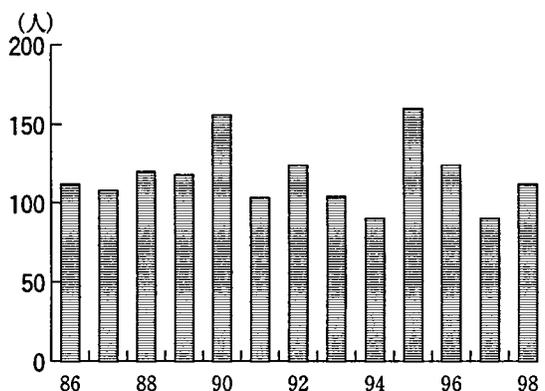


図2 診療患者人数の推移

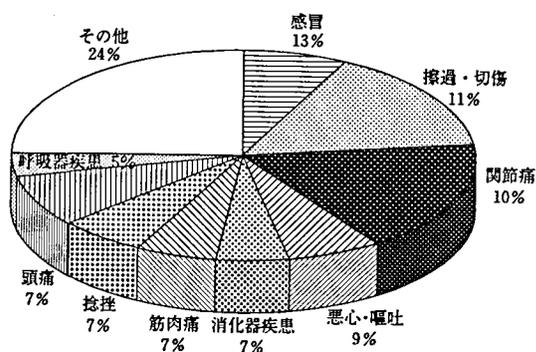


図3 疾患別割合 (1995～1998の累計)

3. 年齢別患者統計 (図4)

常念山系は北アルプスの中では比較的標高も高くなく、温かな山容から集団登山や子供連れの登山、さらに近年の中高年の登山ブームにより高齢者の登山も増加している。

最近4年間の年齢別患者数は、10～20代と40～50代の2つにピークがあるが、前者は山小屋従業員の病気や怪我が主で、後者の中には循環器疾患が増えてきている。長野県警のデータで、中高年が山上で死亡する例の多くは循環器疾患である。

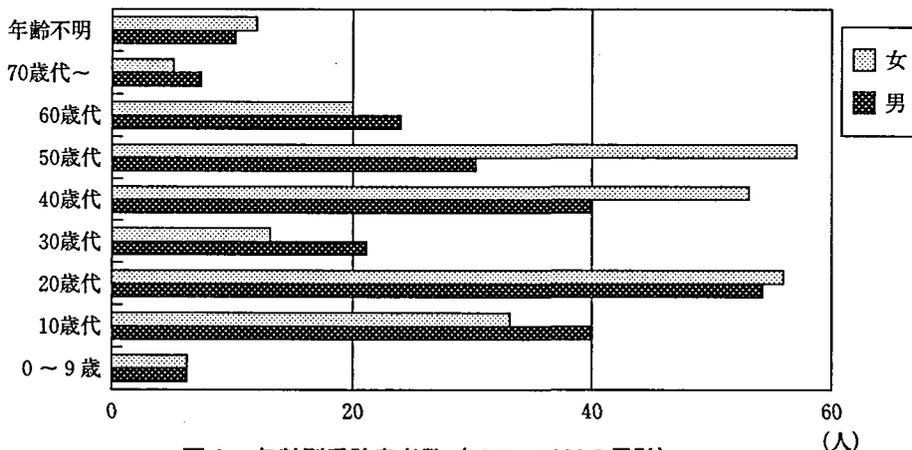


図4 年齢別受診患者数 (1995～1998の累計)

4. 看護活動

診療は医師が行っており、看護婦は診療介助がほとんどであるが、限られた器具や薬品をいかに活用するか、山登りで疲労しきって診療所を訪れた人をいかに癒すかなど役立っていることは大きい。

そこで、今年（1998年）の診療所開設期間（7/18～8/20）に常念診療所で診療に携わった看護婦にアンケート調査（n=30）を施行した。（常念診療所内にて）

1) 診療所での経験回数

初めて	10（人）
2回目	6
3回目	5
4回目	4
8回目	2
10回目	2
13回目	1

1/3が初めて訪れる人であったが、中には、10回を越えて毎年のように訪れる人もいる。

2) 診療所に来ようと思った動機（複数回答）

山に行く良いきっかけ	21（人）（70%）
山が好きだから	14（47%）
診療所で看護がしたい	4（13%）
友人に誘われて	2（7%）

看護というよりは、山に行くきっかけという遊び心の方が強いが、何回か続けて訪れる人の中には‘診療所で看護がしたい’と、きちんと意識している人もいる。

3) 診療所に来た感想（複数回答）

来て良かった	24（人）（80%）
また来たい	12（40%）
思っていたよりつらい	3（10%）
もう来たくない	0

初めて訪れた人も含めてほとんどの人が、‘来て良かった’ ‘また来たい’ と思っており、山登りはつらかったが、それでも来て良かったと思えるようである。何人もの人が繰り返し訪れていること背景だと思われる。

4) 診療所において、できると思われる看護（複数回答）

安心感を与える	15(人) (50%)
応急処置・診療介助と工夫	14 (47%)
話を聴く	10 (33%)
下山方法の指導	3 (10%)

応急処置はもちろんのこと、思っている以上に山では診療所を訪れる人の不安が強いことを感じ、疲労しきっている人に安心感や明るさ・暖かさを与える、話を聴く、というような精神的フォローを考えている人が多くいた。

中には、自分自身が疲労していて、夜間の氷枕交換など十分にケアできなかった。と悔やむケースもある。また、登る途中で顔色の悪い人に出会い話を聞いたところ、「何も食べないで来て、食べる物もない」ということで食料を分け与えたというケースもあるようで、5～6時間必要とする診療所への登山路も活躍の場となっている。

Ⅲ. まとめ

楽しいはずの山登りが、体調を崩したり、思わぬ怪我などすると、一変してつらいものになってしまう。時には生命に関わる事故にもなりかねない。

北アルプスの大自然の中で、少しでも安心して山登りができるために山岳診療所の存在は大切である。診療部門では今年より衛星通信システムが導入され医師不在時の対応がより行ない易くなってきたが、看護はその場において伝わるものである。診療所を訪れて、ただ話を聴いてあげただけの人から、下山後お礼の手紙を病院宛にいただいたこともあり、山岳診療所においても癒しの看護の必要性を感じる。

病院施設を離れた場でも看護婦の活躍の場はたくさんあり、また、学ぶ場でもあるということであらためて思った。

参考文献

- 1) 小林俊夫 他；登山医学 Japanese Journal of Mountain Medicine Vol.9:53-56.1989
- 2) 大森薫雄 他；登山医学 Japanese Journal of Mountain Medicine Vol.17:23-41.1997